H27.10.10

Dr. 和の町医者日記

「がんの基礎知識」シリーズ⑦

胃がん、大腸がんの手術法

腹腔鏡手術という選択

女優の川島なお美さんが、胆管がんで54歳の若さで旅立たれて約2週間。今週も、川島さんのがん闘病を振り返ってみます。

川島さんは平成26年1月に胆管がんに対して、腹腔鏡手術を受けられました。そもそも、腹腔鏡手術は開腹手術に比べると、手術時間は若干長くなりますが、傷が小さいため痛みも少なく、術後の回復も早まり、入院期間も短くて済みます。

実は、開腹手術と比べての利点は術者側にもあります。開腹手術では、おなかの中の限られた範囲しか見ることができませんが、腹腔鏡を使うと、内腔の奥までカメラが近づいて、開腹では見ることのできなかった血管まで鮮明に映るので、より安全に手術ができる場合が多いのです。

ただし、腹腔鏡手術は、病状などによって適応できるケースは限られています。胃がんや大腸がんにはエビデンスがあるので、健康保険も適応されていますが、胆管がんではまだ標準治療ではありません。がんができる臓器によって、腹腔鏡手術の現状は全く異なるといえます。また、大腸がんなどでは開ける穴が1つの単孔式手術も成果を挙げるなど、まさに日進月歩の領域ですし、その実績は施設間によって大きな差があります。

がんの外科手術は可能な限り、取り残しなく完全に切除するために行います。ですから、すべてのがんやすべてのステージが対象になるわけではありません。現在、行われているがんの腹腔鏡手術の対象は、開腹手術と同様に根治できると考えられるがんです。胃がんや大腸がんでは、術後の成績は開腹手術とほぼ同等といわれています。ただし、そうした前向きのエビデンスが出るには、どうしても5年以上かかります。

腹腔鏡手術を受けるがん患者さんは年々、増加しています。川島なお美さんは芸能人なので「傷を小さくしたい。早く舞台に立ちたい」ために、腹腔鏡手術を選択したのでしょう。

「もし開腹手術で行っていたら、結果が違っていた可能性があるか」とメディアから聞かれました。これぱかりは外野席からは、なんとも言えません。がん治療に限らず、医療行為において「もし」や「たら・れば」を言ってもきりがないし、特に結果が悪かった場合には、意味がないどころか有害です。

しかし、あえて言わせていただくならば、川島さんの手術を開腹手術で行っていても結果は同じか、むしろ悪かったかもしれないと思います。

手術時間が12時間もかかったそうです。大腸がんや胃がんでは、腹腔鏡手術の手術時間が開腹手術と比べて極端に長いということはあまりないそうです。しかし、肝臓がんや肝内胆管がんでは長くかかることがあるそうです。川島さんのブログによると、主治医は「状況によっては開腹に切り替えるかも」と説明されていたとのこと。しかし、結果的には12時間もかけて、予定された手術を終えられたそうです。手術後、川島さんは1年半も活躍し、亡くなる1週間前まで舞台に立てた事実こそが、腹腔鏡手術という選択は間違いでなかったと、私は思います。

がんの腹腔鏡手術は「安全と根治性の確保」に、最大限の配慮をしたうえで日々行われ、多くの患者さんがその恩恵にあずかっています。誤解してほしくないのは、群馬大病院の腹腔鏡手術問題は「手術死」で、川島さんの場合は「がん死」。川島さんは手術により亡くなったのではなく、再発というがんの経過によって命を奪われました。どうか両者を混同しないでほしいと思います。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。

腹腔鏡手術　開腹せずに、おなかに数カ所の穴を開けて手術器具を入れ、テレビ画面を見ながら行う手術法。ジャーナリストの鳥越俊太郎さんは直腸がん、プロ野球の王貞治さんは胃がん、女優の仁科亜希子さんはご自身にとって3度目のがんになる大腸がんをそれぞれ腹腔鏡手術で切除した。